

殿様のタウンウォッチング

入封「儀式」としての城廻り

「城踏」No.43(2002年12月)で、鍵町文書「御用日記」から、当時の藩主酒井忠学(ただのり)の城下通行の軌跡を紹介しました。「御用日記」が町方の文書のため町屋エリアについて記載はあるものの、武家屋敷地における彼の動きは不明でした。

忠学の祖父酒井忠以(ただかね)は、『玄武日記』という史料を残しています(以下、『日記』)。藩主自らが記した日記ですから、当時の大名の私生活の一端を知ることのできる史料です。それを読んでいると、藩主は江戸から帰国すると城下を見て廻ることになっていたようです。例えば、天明元(1781)年10月9日条には、

五時半出宅、着用平服、天守へ相越、菱之門内にて下輿、天守見分、備前丸・井戸曲輪・山里・中少丸、夫より歩行にて本丸へ相越、新廊下より勝手坐敷・黒書院・白書院・鶴之間・雁間・虎之間・玄関・舞台・宰相之間、月見櫓より居間帰坐、向屋敷にて夕食事、夫より乗輿にて桐之門尻西へ…

とあり、10月7日の着城後すぐに天守とその他の諸曲輪の見分を行っています。この記事を読むと、城主の天守見分のルートが推定できます。忠以は菱の門で輿を降りると、徒歩で天守へ直登したとみられます。見分後は備前丸→井戸曲輪→山里というルートですから、天守の東から南を廻って降りたこととなります。となると直登ルートは、いノ門→ろノ門→はノ門、そして天守の西側を通過して水ノ門からアプローチしたとみられます。そして「中少丸」(西の丸)を見分後、城主は「本丸」へ向かいます。この「本丸」とは現在の三の丸のことで、当時は御殿のあった曲輪を「本丸」と藩主自ら呼んでいたことがわかります(実は、安永6年12月の帰国時には、天守見分の際、西の丸から「本丸」へ向かうことについて「城へ相越」と忠以は『日記』に書いている。大名の城に対する認識が垣間見られる。『城郭研究室年報』14号、40頁を参照)。

「本丸」に入った忠以は御殿の各部屋を廻り(「座敷廻り」)、向屋敷に移って夕食となります。それで一日の用務が終わるかと思いきや、今度は輿に乗って桐門(大手門)を出て行き、①のコースで中曲輪南部分を廻って、七つ(午後4時頃)に屋敷(「本丸」ではなく東屋敷)に帰っています。

翌日は、やはり五つ半(午前9時頃)に屋敷を出るとまず即是堂に参り、平服に着替えて②のコースで中曲輪東部を廻り、四つ半には屋敷へ帰っています。そして11日は、五つ半に出て、③のコースで中曲輪北部から野里門を出て坊主町まで足を延ばし、再び野里門を入れて四つには帰っています。この行程を忠以は『日記』で「城内廻り」と記しています。

12日は10日と同様、即是堂にまず参ってから平服に着替え、久長門を出てから④のルートで外曲輪東部分を廻っています。この日の行程はそれまでとは異なり「城外廻り」と記していますから、各ルートからみて、中堀を境として城内と城外を区分する認識のあったことが窺えます。

10月13日条では、

五半時過出宅にて着用ふくき麻半、即是堂へ相越御当日拝礼、畢て直二平服二着かへ城外廻り、内京口出、坂田町南へ、赤堀代助前通寺尾広右衛門屋敷脇西へ、鳥山孫右衛門屋敷相廻南へ、井上奥右衛門屋敷相廻西へ光源寺前迄、白銀町通西へ、新身町永野多七前西へ、関野勇助前より北へ、

鷲門入大名町筋、帰宅四半過なり、今日にて城内外廻り不残相済、城代団右衛門居間へ呼出し一寸逢候事城内外廻り無滞相済恐悦と申候、内外奇麗にて一段二候と申事

とあり、⑤のルートで「城外廻り」を行いました。これまでの「城内外廻り」のルートは下図の通りです。ベースの絵図は酒井家旧蔵の「姫路侍屋敷図」で、図中、色が白く小さな文字の書き込みのある区画が武家屋敷を示しています。それにルートを重ねてみると、「城内外廻り」が武家屋敷が建ち並ぶ街路を一筆書きのように廻っていることがわかります。忠以は『日記』にルート上で目印となる屋敷の主人名や町名を記していますから、このような絵図を実際に参照していたと考えられます。

また忠以が、帰国後にすべき用向きを箇条書きにした「例書」を『日記』に写しています(天明元年10月7日条)。どうも「城内外廻り」は、帰国後すぐに行うべきものとされていたようです。そして、物見遊山に出かける日は歴代将軍や酒井家歴代の命日などは避けたのに対して、「城内外廻り」はその限りではないところを見ると、定式化された用向き、すなわち「儀式」ではあるけれどもそれほど仰々しいものではなかったのかもしれない。

たしかに、天守見分の9日を除けば、どれも五つ半に出かけて即是堂に参り、平服に着替えたあと、四つには帰宅していますから、1時間程度のことです。そんな用向きでも「今日にて城内外廻り残らず相済む」とわざわざ書いているところを見ると、忠以にしてみれば「儀式の一つが「まずは、やっと終わったあ」という気分だったのでしょう。

忠以は天明8年の帰国時にも同じルートで「城内外廻り」を行っています(『日記』)。この「儀式」には、藩主の帰国入封を家中に知らしめるとともに、家中及び城郭を観閲する意味があったのではないのでしょうか。

さて、一息ついた忠以は、居間に城代本城団右衛門を呼びました。団右衛門が「城内外廻り滞りなく相済み恐悦」と申し上げます。すると忠以が「内外奇麗にて一段に候」と答えて、ここで5日間にわたる「城内外廻り」は恙なく終了となったのでした。

